Heinz F. Wendt 編者の „Sprachen“

塩　谷　饒

本書は Fischer Lexikon の一巻に加えられた381ページの小著である。1961年10月に発行されているので新著の書評・紹介というわけには行かないが，最近この本から専門の勉強に利益を受けた点があったのと，われわれの身近でこの書物の内容に触れた文を見ないので，ここに覚え書きを発表して置きたい。

編著者はこの本の中で，世界の主要な言語の構造と親近関係を要領よく示すとともに，言語学研究の基礎概念を説明することによって言語研究の指針を与えようとしている。

主要な言語というのは編著者が名付けた表現ではなく，本書の裏表紙に刷られた広告にある語である。著者はどんな言語も研究の価値あることを序で述べているが，書物で視覚的に訴える便から，文語を確立した文化語を主として選んだと言っている。これは，言語修得の Lesestück としようという配慮にもよるものである。すなわち，印欧語族の中では親族語の多いゲルマン，ロマンス，スラヴ諸語や，サンスクリット，ギリシア語といった古典語のみならず，特種の文字を持つペルシァ語，ヒンドゥー語，アルメニア語の解説がある。非印欧語系ではセム・ハム語族（とくにアラビア語，ヘブル語を中心，）フィノ・ウグル語族（フィンランド語，ハンガリー語），日本語，中国語，ヴェトナム語，モンゴル語，トルコ語などについての説明がある。アフリカの諸言語については一括して Afrikanische Sprachen という標題で，15ページにわたっ

て分布と系統が示されているほか，一項目を設けてスワヒリ語やHaussaと呼ばれる特殊な言語の説明が行なわれている。またエスペラントなどの国際話についても簡単な解説がある。これだけの種類の言語は一人で良心的な解説を引き受けられないからであろうか，verfaßt und herausgegeben と記しているが，どの項目を自ら執筆したのかは不明である。

言語学上の基礎概念については，アクセント，正書法，音声学，音韻論，言語の分類について項目ごとに正確で分りやすい解説が示されているが，言語の分類では研究略史と研究の主な方法の紹介が行なわれている。言語の構造に関する他の分野——たとえば形態論，文章論，造語論など——の説明は序でなされて居り，それらが具体的な言語の解説にあたってどこで取上げられているか指摘されている。

ドイツ語の研究に当るものにとっては，言語学の基礎概念のほかにドイツ語（Deutsch），ゲルマン語（Germanische Sprachen）が参考になるであろう。フランス語はロマンス語という項目の中で，またロシヤ語はスラヴ語の項で他の言語と対比しながら説明しているのにドイツ語は単独に20ページにわたってとりあげているのは，それだけ母語を重んじているからであろう。歴史的なことはGermanische Sprachenに一切ゆずり，音韻・形態・シンタクス・造語にわたって共時論的立場を通して説明しているのが特色である。ドイツ語の共時論的研究は1950年代になってようやく軌道はのった感があり，Erben のように全面にわたって統一のとれた記述をうたう詳しい文法書も現われた。しかし，詳注と理論の詮議にわずらわされることなく，これほど要領よく übersichtlich にドイツ語の構造を示した例はそう簡単に見付からないであろう。

Das Phonologische System では母音・子音音素の提示についで，その音声的実現の傾向の説明に及んでいるところに特色がある。

Heinz F. Wendt 編著の „Sprachen"

Morphematik と題する項では，ドイツ語の形態素が各品詞についてどのように現われ，どんな機能を持つかということが吟味されているが，この部分はもっともスペースがさかれており，その上まとまりがよく，とくに優れた記述である。しばしばシンタクスで扱われる品詞の機能が Morphematik で取り上げているので，シンタクスでは文の構造が中心に論ぜられている。また造語論は比較的に従来の文法との差が少ないのは，やはり一部が Morphematik で論ぜられているためである。このような記述による Deutsch を充分に理解するためには，もちろん共時論言語学の基礎概念についてわきまえていなければならないが，この書物の中からも大部分学びとることができるのはやはり Lexikon としての長所であろう。

Germanische Sprachen ではまず現代ゲルマン語の分布と歴史的な関係による分類を扱っている。分布ではこれを語るものの数を示していることと，公用語のみならず，独立の言語と見なされるものがすべてあげられている。ゲルマン語の分類については近年伝統的な東—西—北のわけ方が問題になっていることに触れた上，北部・南部という無難な分類に従っている。

ここではドイツ語も最古の文献から現代に至る間の時代的な区分に従って呼ばれ（Ahd. Mhd. Nhd.），きわめて簡単ながら共通語の歩みも扱われている。

こうして互いに位置づけられたゲルマン諸語の構造は，総論と各論に分けて記述されている。

まず，ゲルマン諸語が他の印欧諸論に対して示す音韻上の特色，すなわち第一次音推移（Grimm の法則）がその例外（Verner の法則）とともに例示されており，むろん第２次音推移（高地ドイツ語母音推移）

についても言及されている。

それから基礎的な形態論上の特色が，形容詞，比較，動詞（Ablautによる強変化動詞と子音形態素添加による弱変化動詞）にわたって吟味され，語彙の共通性が21の単語によって例示されている。

総論の第2部ともいうべきものは，これら諸語相互の差異点である。これは性，冠詞複数の作り方，格，副詞の造語，受動態の作り方などにわたって論ぜられているが，差異点はどうも übersichtlich な記述が行ない難いように思われる。

ゲルマン語の各論で詳しくとりあげられているのは，英語，オランダ語，スウェーデン語，デンマーク語である。これらはドイツ語その他の言語の場合同様，まず一ページ前後のテキストが音声記号による発音の標示と直訳付きで示され，それから原意を汲んだ翻訳が添付され，音韻文法の説明へと移行してゆく。テキストは共通な材料を使って比較文法に役立たせるという方針ではなく，ゲルマン諸語に関する限り極度に高級な文語であるのは学習の理想を高くかかげる配慮からであろうか。ドイツ語の場合は Thomas Mann の Buddenbrooks からの一節であるが，英語：Robert Graves の Count Belisarius，オランダ語：Huisinga の In de schaduwen van morgen（朝の蔭に），スウェーデン語：Selma Lagerlöf の Gösta Berling，デンマーク語：Søren Kierkegaord の Enten--Eller（あれか，これか）という具合である。全般にわたって構造主義的な立場をとる編著者がテキストの音については音韻表記でなく，音声標記を行なっているのは，やはり発音修得乃至は観察への手掛りを与えようとする意図によるものであろう。

オランダ語につづいて Afrikaans と呼ばれる言語がテキストを省いて解説されている。これは現在英語とともに南アフリカ共和国で公用語

と認められている言語であるが，17世紀に移民がもたらしたオランダ語にもとづき，オランダ語に比べれば文法体系が簡単で，形態音韻素の消失が目立つ。

またスウェーデン語，デンマーク語の前に北欧語としてのまとめがあり，ノルウェーにおける二つの公用語 landsmål と ryksmål の関係を明らかにしながら，これら相互の音韻上の特色を甚だ要領よくまとめている。スウェーデン語，ノルウェー語における高低アクセント，デンマーク語の喉頭閉鎖音音素〔?〕や破裂の弱い無気閉鎖音について一言説明が行なわれているのは，正書法では酷似している言語の特徴をよく示しているものと思う。 Germanische Sprachen の占めるページ数は約30であって，ドイツ語の親族語への瞥見はこれで充分であり，またドイツ語のゲルマン語内における位置も明確に認めさせられる記述である。

この書物の終わりにまとめられた文献欄には，専門の研究やつっこんだ学習のために必備の参考書があがっているわけであるが，ドイツ語に関する限り，妥当であると思われる。すなわち，歴史文法からは Paul, 共時論的文法としては Duden, Erben, Glinz などが， また語史に関しては Bach の名が見える。

Germanische Sprachen に関しては当然個々の言語の（高級な）入門書が挙げられているが，親近関係を歴史的に論ずる書物として Krahe や Meillet の著が名を出している。これらは小著であり，今日の学問から見れば補足の余地はあるけれども，ゲルマン語研究に関する最高水準の入門書である。

なお直接にドイツ語，ゲルマン語研究に関係があるわけではないが，日本人の立場からは日本語に関する記述に関心を持つのは当然であろう。

Japanisch という項目に割りあてられたページは13ページである。一口に言えば，音韻と文法の構造がさまで複雑とは言えぬ日本語が，実際の学習に当って印欧語を母語とする人には中国語以上の難しさがあることを明らかにした感がある。

音素の実現にあたって聞き慣れない音声の指摘にはじまり，複雑な文字の体系に至る解説はなかなか優れている。ことにローマ字化の実現困難の理由を幾つかあげていることは欧米の学者としては珍しいのではあるまいか。

また文法の体系も，助詞の機能などについては格を以て説明にあてるなど，ドイツ語を母語とする側からの肉薄ぶりがよくうかがわれる。すなわち，

Absolutus: hito wa

Nominativ: — ga (ŋa) > ein, der Mensch, Menschen
die Menschen <

Genitiv: — no > eines Menschen < usw.

Dativ: — ni > einem Menschen < usw.

Akkusativ: — wo (ɔ) > einen Menschen < usw.

などのように説明されているのを見ると，日本人がドイツ語の格の用法を大まかに〝がの，に，を〟，と言うのもさまで不当ではないように思われる。

わずか80余語の文例ではとうてい充分に日本語の形態や構文の例を示すわけには行かず，択んだ文の内容も適当だとは言えない。

しかし日本語の分布と系統に関する説明はきわめて正確で，信頼に足りる。

冠末の参考文献の箇所を見ると，ドイツ語で書かれた文法書は数種あ

るのに，辞書は日露，日英と並んで木村謹治編の大和独があがっているだけである。すなわち，ドイツ人の編者が見られないわけであるが，これはドイツにおける日本語学習人口がきわめて少ないことによるからであろう。

全般として解り易い文体であり，印刷もよいと思われるが，ときに誤植が――ことに音声の表記に関して――見られるのは残念である。（この点は筆者の利用した本に関してであるから，すでに改まっているかも知れない。）